

渋沢敬三の画像・映像資料認識

Shibusawa Keizo's Conceptualization of Visual and Audio-visual Materials

井上 潤

INOUE Jun

要 旨

アチックミュージアムの主宰者・渋沢敬三が、画像・映像を資料として認識し、多用した様相について検証する。

アチックフィルム・写真が形成されたその原点を、渋沢敬三が幼少期より本能的に兼ね備えていた観察眼に見出すことが出来る。敬三は、生まれた自邸の「潮入りの池」に住む様々な生物を幼年から少年期にかけてよく観察していた。まさに、そこに原点を見出せるのである。

敬三の観察眼は、自身の成長とともに発達し、単なる観察から対象への問題意識をもって観察するようになっていく。さらに、観察によって得られた情報を表現するように変化していった。最初は、友達との遊びの中でのことであったが、やがて、学校での指導をもって、より一層、観察したことをまとめ、発表する機会に接し、観察したことの記録化、資料化が必要であると感じると同時に、文字説明だけでなく、図示の手法が用いられ、画像の有効性に気づき、画像資料への認識が高められていくようになる。

敬三本人の意識も含め、アチックミュージアムでは、比較的早い時期から写真・映像フィルムを民俗・民具調査にも用いるなど、画像・映像資料を積極的に活用するが、その後の敬三の「日本実業史博物館」構想にみられる、記録資料として積極的に活用する・出来るという画像への認識や、『絵巻物による日本常民生活絵引』に見られる、画像が内包する多くの情報を読み解くといったことなどから、資料性の認識を高め、用い方を高度化させていったことが読みとれる。

渋沢敬三の画像資料認識の特徴として、写真・絵画の記録性を重視している点、自然な姿もしくは意識的な姿を使い分け、より効果的に視覚でとらえている点、特定の資料でなく、多様な資料の観察から情報を引き出している点、出来る限り多くの情報収集を行い、データベース化して資料としている点、いわゆる今日の「情報資源化」を強く志向していた点などを指摘したい。

【キーワード】 潮入りの池、腕白雑誌、修学旅行記、日本実業史博物館、
『絵巻物による日本常民生活絵引』

1. はじめに

学術調査・研究においては、「観察」という手法によって得られた情報を資料化することが行われてきたが、それは、文字によって表現することが主流であった。ただ、図・画、スチール写真、さらに映像フィルムなども用いられるようになり、画像・映像が、対象を資料化する手段であることが認識されるようになったのである。

今回、「アチックフィルム・写真にみるモノ・身体・表象」と題する共同研究を通して、敬三が主宰したアチックミュージアムが調査・研究にて収集したアチックフィルム・写真が、当時、そして今日における研究においても、資料として極めて有効であることが確認された。本稿では、アチックミュージアムの主宰者・渋沢敬三が、画像・映像を資料として認識し、多用した様相について検証してみたい。

2. 原点：敬三の観察眼

改めて紹介するまでもないが、今一度、渋沢敬三の生涯を簡単に振り返ってみよう。1896（明治29）年8月25日、父・篤二、母・敦子の長男として東京・深川に生まれる。東京高等師範学校附属小学校、同中学校から仙台の旧制第二高等学校を経て、1921（大正10）年、東京帝国大学経済学部を卒業後、横浜正金銀行（現三菱東京UFJ銀行）に入行する。1926（大正15）年には、第一銀行に入り、取締役・副頭取を歴任後、1942（昭和17）年に、日本銀行副総裁に転出し、1944（昭和19）年には総裁となる。1945（昭和20）年10月、幣原喜重郎内閣の大蔵大臣となり、戦後の経済的混乱の收拾にあたる。しばらく公職を追放されるが、1953（昭和28）年、国際電信電話株式会社の初代社長に就任し、その後も金融制度調査会会長、国際商業会議所日本国内委員会議長などを務めた。

経済界で活躍する一方で、学問・文化の発展にも大きく寄与している。アチックミュージアム（後の日本常民文化研究所）を主宰し、民具等の蒐集とともに、民俗学・民族学および日本の水産史等の研究を行い、数多くの成果を残している。また、研究活動や博物館設立などの文化事業に対して多大な財政的支援を行っている。1963（昭和38）年10月25日、67歳で死去した。

そのような生涯を生きた敬三であったが、敬三は、幼き頃より仲間たちと鉱物等の収集を行ったり、そのコレクションを持ち寄って博物館のまねごとをして、遊びの中で遭遇した新たな発見等に感激し、学問への志を芽生えさせていった。本能的に兼ね備えた観察眼を開花させ、より磨きをかけていくような経験が積み重ねられていくのである。

その一つが、幼・少年期、自邸の池に住む様々な生物の観察であった。

1) 「潮入りの池」

敬三が生まれた東京・深川の邸内には「潮入りの池」（写真1、2）というのがあったが、東京内湾につながっていたので潮の干満があり、それによって様々な魚や小動物が生息していた。敬三は、幼年から少年期にかけてよくこの池の傍らにしゃがんでじっと眺めていた。そんなことから蛭をいじりだしたと本人も言っているように、敬三にとっては、まさにそこは自邸内の水族館であり、のちに、アチックミュージアムを中心とした学問・文化面での活動研究活動の原点であるとする指摘もある⁽¹⁾。

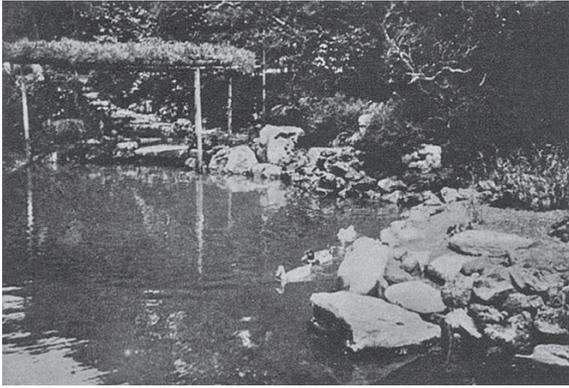


写真1 潮入りの池 (引潮時)

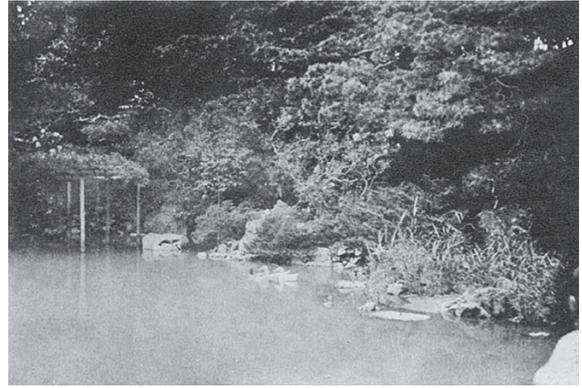


写真2 潮入りの池 (上げ潮時)

3. 原点：画像を資料として認識

敬三は、「潮入りの池」での小動物観察を端緒とし、彼の観察眼は、自身の成長とともに発達し、単なる観察から対象への問題意識をもって観察するようになっていく。さらに、観察によって得られた情報を表現するようになっていった。最初は、友達との遊びの中でのことであったが、やがて、学校での指導をもってより一層、観察したことをまとめ、発表する際には、観察したことの記録化、資料化が必要と感じ、文字説明だけでなく、図示の手法が用いられ、画像の有効性に気づいていくようになる。その諸相について、以下に触れてみることにする。

1) 「腕白倶楽部」：『腕白雑誌』『腕白世界』

1907 (明治 40) 年、敬三が 11 歳の時、友人たちと「腕白倶楽部」(写真 3) を組織し、『腕白雑誌』『腕白世界』(写真 4) という同人誌を発行している。内容は、お伽ばなし、旅行記、俳句、漫画等を銘々が思い思いに書き綴っているが、その中に「学問」と称して、歴史、地理の分野で調べた自由研究の発表の場が設けてあった。敬三も「動物アカクマアリ」として、頭部・全部に分けての詳細な図解入り解説原稿を寄せている (写真 5)。まさに、生物学者を志し始めていた頃の一端が窺えるが、より理解を深めさせるための図示、画像利用の有効性を感じ始めていたのではないかと推察する。観察を研ぎすまし、興味・関心度を高めていくという意味での研究活動の原点が「潮入りの池」にあったとすれば、調査し、まとめ、発表するという意味での研究活動の原点は、この『腕白雑誌』に見出せるものと指摘出来る。

ところで、敬三は、アチックミュージアムに対して「チームワークのハーモニアスデヴェ



写真3 腕白倶楽部員のお伽芝居

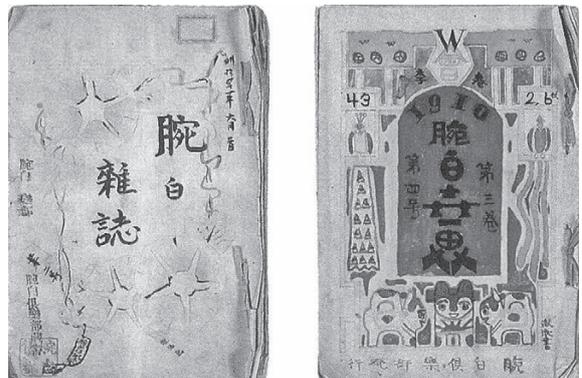


写真4 左：腕白雑誌 右：腕白世界

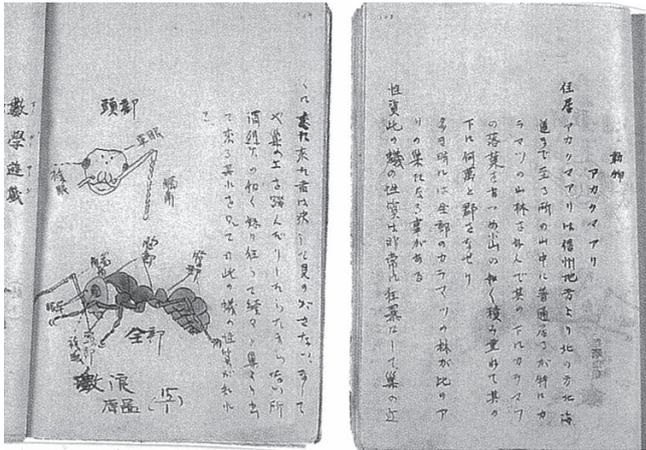


写真5 アカクマアリ頁

ロップメント」を見出さんとすることを望んでいた。「人格的に平等にして而も職業に専攻に性格に相異った人々の力が仲良さ一群として働く時その総和が数学的以上の価値を示す喜びを皆で共に味ひ度い」⁽²⁾というのである。仲の良い仲間が一つになって仕事をすれば、数学的な総和以上の価値を見出せる。その考えの代表的な試みがアシナカの共同研究や『民具問答集』の編集等に現れており、アチックミュージアムの活動全体につながっていく。ただ、この考えは、アチック

ミュージアム草創期に芽生えたものではなく、すでに「腕白倶楽部」にそれをみることが出来る。つまり、本論から少しはずれるが、違った意味でのアチックミュージアムの根元となる考えも、幼い時よりスタートしていたと指摘出来るのである⁽³⁾。

2) 附属中学校の修学旅行記

敬三の学問的基礎は東京高等師範学校附属中学校（以下、附中）、第二高等学校（以下、二高）時代にまず形成され、それは動物学的指向であったと言われている⁽⁴⁾。ただ、基礎を築くという意味では、附中学時代の方に比重があったようである。

その附中にあって敬三に強い影響を与えた2人の教師がいた。1人は、生物（植物）担当の稲葉彦六で、同校にあって名教師といわれた人物である。そして他の1人は、地理担当の大関久五郎（写真6）で、絶大な影響を敬三に与え



写真6 上高地清水屋前にて〔附中山岳会〕中央麦藁帽子姿が大関久五郎先生



写真7 附中2年修学旅行

たと当時の級友も語る教師である。例えば、人文では産業の分布とか、村や町がどうして出来たか、さらに諏訪湖ならば地学から地質の成り立ちを実に詳しく教えたという。大関は、指導上で様々なアイデアを出している。例えば、自分の住んでいる区の地誌を調べさせて報告させるなどである。その大関のアイデアの1つに、ここに紹介する修学旅行記の作成があった。

敬三が通った附中では、毎学年時に1～3泊の修学旅行を挙行している。因みに、敬三の修学旅行先を見てみると、1年時は、佐原、銚子方面（1泊）、2年（写真7）時は、「修学旅行記」（写真8～10）にて紹介する筑波山から水戸方面（2泊）、3年時（落第のため同学年を2回経験する）は、箱根、修善寺、熱海方面（3泊）、4年時は、甲府、諏訪湖、長野、新潟、川中島方面（3泊）、5年時は、助川から仙台、磐梯山、白河方面（3泊）の修学旅行を経験している。

同校での修学旅行では、先述のとおり、地理の大関久五郎教諭の発案により生徒に課せられるようになった「修学旅行記」（写真8）の作成、提出があり、「修学」の意を明確に打ち出したものであった。

修学旅行に出かける前に、すでに旅行先の資料集めをさせ、出発後は、車中の見聞、旅行先での教師の説明（写真9）、途中集めた様々な資料等を整理して、帰京後まとめて提出するというもので、地図を買って来て折りこんだり、絵葉書を貼って厚くすることも考えられている（写真10）。敬三の級友・宮本璋は、論文を書くことはその時分から教えられたようなものだったと言っているという⁽⁵⁾。

より高度化した記録、報告書作成に際

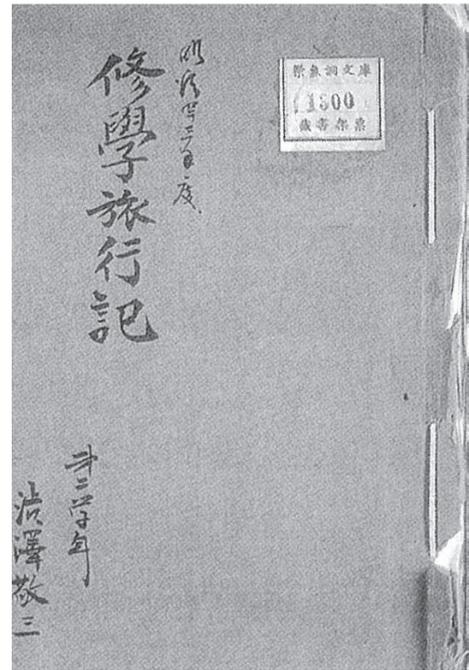


写真8 2学年修学旅行記表紙

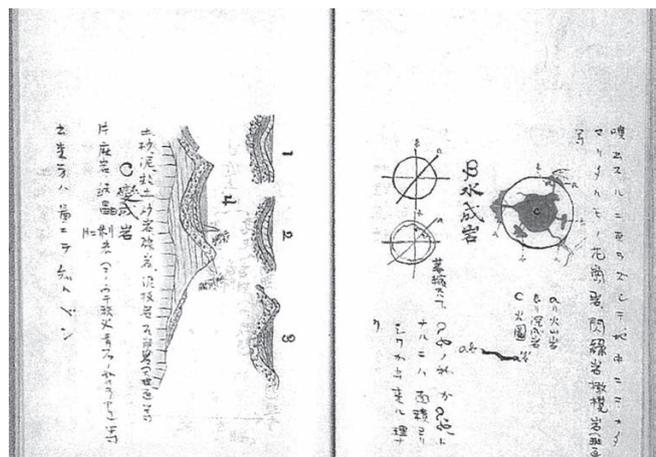


写真9 修学旅行記地理講話まとめ

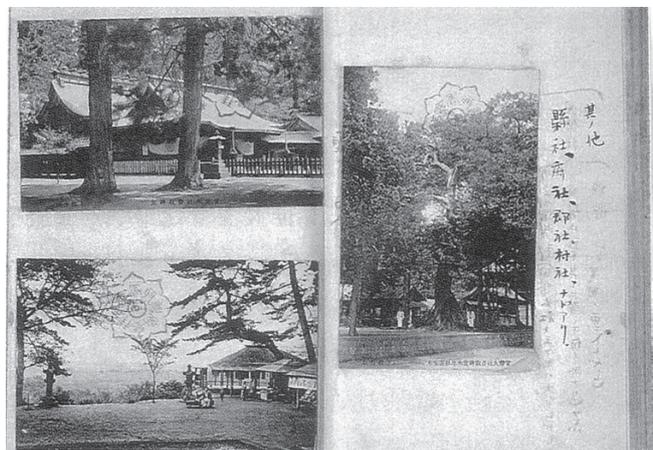


写真10 修学旅行記絵はがき

して図、写真（絵はがき）を用いることが、学校での指導を通して自身の中に浸透していった。画像を資料とする認識を強めていったようである。

このような良き教師の指導に恵まれた附中時代の敬三は、4年時に箱根双子山や武州雲取山で蛭を採集したり、諏訪湖でプランクトンを採集している。水泳部のあった富浦で採集した猫鮫に寄生する海蛭に関しては、丘浅次郎博士に贈って珍しいと褒められたりもしている。また、そのような採集・調査活動をもとに、中学時代から「蛭四種について」、「金魚の音に関する知覚の一観察」、「ダフネ」（みじんこの一種）、「日本における自然保護と記念物」、「諏訪湖について」、「蟻の社会性」といった論文を執筆し、動物学に対する指向を明確にし、自分自身の中で核としていったようである。

余談とはなるが、5年時にまとめた「我が尊敬するエーベリー卿の蜂蟻に関する研究の一部について」は力作であった。同論文中にある蜜蜂の実験に際しては、先に紹介した稲葉彦六の指導を受けている。また、敬三は、この中で、銀行家であり、一流の学者であったジョン・ラボック（後にエーベリー卿と称する）の略伝も執筆しているが、そこには、自分の生くべき将来とだぶらせてラボックを意識していた観が窺えるものとなっている。

3) 父・篤二の行動から

敬三の父・篤二は芸術的素質のあった人で、まず、写真でその素質が発揮された。

篤二の写真の先生は中島待乳園であったとする指摘⁽⁶⁾がある。その指摘では、1899（明治32）年に、姉・歌子の夫・穂積陳重に同行して欧米を旅行をするが、ロンドン、リゼント街にあるステレオスコピック社でも技術習得を心がけたにちがいないとされている。同社は英国王室御用写真師であった。篤二が「之レハ倫敦一、二ノ大写真屋ニシテ余等写真ハ即チ此ノ店ニテ写セルモノナリ。余ハ自身ニテ写セル写真ハ即チ終始此ノ店ニテ写セルモノナリ。余ハ自身ニテ写セル写真ハ即チ此ノ店ノ暗室ヲ借り現像セルモノナリ。日本ノ中島待乳園トモ申スベク、余ノ写真ノ先生ナリ」と記した書状を妻・敦子に書き送っていることから明らかであるという。

また、穂積陳重が、自宅への書状に「篤二君は先日求めたる双眼鏡形写真器を肩に掛け、仕立おろしのジャケットを着し倫敦には七、八年も居りますと言う様な風にて諸所の風景に対し得意の腕を振われたり」と書いている通り、篤二はロンドン着後2週間目にステレオスコピック社で「写真器械」（双銀鏡型写真器械）を購入している。それ以後でも、1907（明治40）年ごろ、はじめてイーストマン・コダックのロールフィルムの手提げ機が現われると、すぐそれに移るなど、つねに先端を進もうとしていたというのである。

敬三は、その父が長年撮りためた写真を、父の三十三回忌に父を記念したいと思ってまとめた『瞬間の累積』⁽⁷⁾の「あとがき」で、「父のうつした写真を通覧すると、たんなる家族だけを写したのではなく、一種の、今でいえばルポルタージュ写真の先駆者というくらいに各方面のことを被写体にしています。したがって、この写真集によく当時の面影をしのんでおるとおもいます」とあるように後世に遺りうるものと認めている。

たしかに、篤二は、優れたカメラ・アイの持主であり、ルポルタージュ写真の先駆者と位置づけられるだろう。それは、『瞬間の累積』所収写真のみならず、16ミリ映写機にて撮影された様々な記録フィルムからも指摘出来るのである。そして、これら写真やフィルムは、後世に遺りうるものであり、当時の社会史、風俗史の資料とすることが出来るのである。

敬三は、父・篤二から直接の指導を受けたようではないが、身近に接している中で、少なからず影響を受けていたと思われる。

4. 画像・映像資料の積極的活用

敬三本人の意識も含め、アチックミュージアムが目指すところは、生活文化の物質からの探求であり、変化・変容（特に地域・周辺環境の中での把握）の探求に集約されていく中で、「モノ」資料（民具）に目が向けられていくが、早川孝太郎に誘われて奥三河に行き、花祭りや当地の生活のあり様などを見学するうちに、花祭りを中心とした奥三河の暮らしを記録映画化していくように、比較的早い時期から写真・映像フィルムを民俗・民具調査にも用いるなど、画像・映像資料を積極的に活用する。以下では、その積極的活用を試みた敬三の諸相を紹介する。

1) 日本実業史博物館構想に見られる画像資料認識

敬三が心より尊敬した祖父・渋沢栄一が1931（昭和6）年11月11日に亡くなった。遺言により東京・飛鳥山の渋沢栄一郎の土地・建物が、栄一の遺徳顕彰を目的とする財団法人竜門社（公益財団法人渋沢栄一記念財団の前身）に遺贈された。「公のために使用してもらいたい」とする遺志を受け継ぐために、利用方法を検討する中で、渋沢敬三の「一つの提案」として示された「渋沢青淵翁記念実業博物館（近世経済史博物館）」案構想が浮上してくるのである⁽⁸⁾。鉄筋コンクリート造り地上3階・地下1階延2,640 m²というもので、内容は以下のようなものであった。

青淵翁記念室 渋沢栄一の生涯を遺品・写真・著作物を通して展覧し、その変化性、多角性、一貫性を明らかにする。

近世経済史展覧室 日本経済史上最も画期的変化のあった文化・文政期から明治末期に焦点を当て、その変遷と発展過程を示す資料を陳列・収集し、実業教育と社会教育上の資料とする。

肖像室 近世における経済文化に貢献した人物の肖像を姓名、略伝とともに分類して掲げ、社会教育資料として提供する。実業家・企業家・産業家・工業家・農業家・漁業家・鉱業家・発明家・学者・評論家等、日本の実業発展に貢献した政治家・外国人等があげられる。

この計画から2年後の1939（昭和14）年5月13日、渋沢栄一生誕100周年祭の一環として、渋沢青淵翁記念実業博物館の地鎮祭が行われ、1937（昭和12）年から1944（昭和19）年にかけて行われた資料収集が、地鎮祭を機に本格化した。第一銀行本店に設立準備室が設けられ、収集資料はここに保管された。

その後、戦時経済統制によって建築資材の入手が困難となり、博物館建設の延期が余儀なくされたが、敬三の指導のもと資料収集は継続された。3年にわたる敬三の資料買い付けにより、市場に出回る錦絵・地図・番付は底をつき、余程でないといえないものがなくなるという程であった。収集した資料は次のようなものである。

- ・商業なり産業なりの経営に使用された器具類〔例えば、看板、のれん、引札（広告）、帳場格子、千両箱、鍵、矢立など〕5,174点
- ・商業なり産業なりの経営に関する絵画1,106点、写真2,450点、書籍約6,000点等
- ・地図350点、番付257点、竹森文庫2,484点、古紙幣7,573点、広告350点

戦況の悪化に伴い、博物館建設はますます不可能となった。1942（昭和17）年、敬三が第一銀行副頭取から日本銀行副総裁へ転出し、翌年、第一銀行と三井銀行の合併によって、帝国銀行が創立されると、第一銀行に保管していた資料の移転問題が起きた。そこで敬三は1943（昭和18）年に渋沢家の縁戚にあたる阪谷家の邸宅を購入し、資料保管場所とした。同時にそこを「日本実業史

博物館」にする計画を立て、展示ケースの整備など開設準備を続けた。

結局、収集資料は第二次世界大戦による戦災を免れ、無事だったが、財閥解体・旧阪谷邸の占領軍による接収という事態に、博物館計画は挫折してしまった。残された資料については、1951（昭和26）年、敬三より管理を委ねられていた渋沢青淵記念財団竜門社によって当時の文部省史料館（現国文学研究資料館）に寄託され、1962（昭和37）年には、寄贈の手続きがとられ、その後、同史料館の所蔵に帰し、保存が続けられることとなった。

（1）収集資料の意義

敬三が、日本実業史博物館開設準備の段階で収集した資料には、以下のような点でその重要性が認められる。

まず第一に、尊敬する祖父・渋沢栄一の事績を世に示すに当たり、単に個人の事績を紹介するだけでなく、その人物が生きた時代の特徴を描くことで、より立体的に個人の事績を捉えることが出来るという発想があることである。

また、敬三が極めて多角的な資料収集を行ったことは特筆に値する。例えば、ある業種について実際に使用した道具類、それを描いた絵画または写真、実際の活動を示す文書や宣伝用の広告、関係する図書等といったように1つの体系性を帯びた収集だったのである。また、収集資料から、近代の産業化を担った人々の生活にまで視野を広げて「実業史」というものを体系づけている点が見出せる。これは敬三が美術品や骨董品ではなく、日常生活から生まれる民俗品に早い時期から強い関心を寄せていたことに関係している。1930年代の日本の博物館や美術館では特に収集対象になっていなかった日常生活用具に焦点を合わせていること、すでにこの時期に写真を対象にしていること、個々の写真だけでなく、グラフィック系の雑誌類までも、写真を目的に収集していることに特色が見出されるのである。また収集だけでなく、当時の風俗を撮影して残すなど写真の記録性を重視していることは注目に値する。

ビジュアル資料という点では、写真が普及する以前のものとして錦絵に着目している点にも注目出来る。錦絵というと、美人画や役者絵に注目しがちだったが、敬三は、多種多様な錦絵の中から交通、ものづくり、都市の繁栄、日常生活といったテーマを持つ「実業史錦絵」と呼ぶにふさわしいコレクションを形成させていたのである。

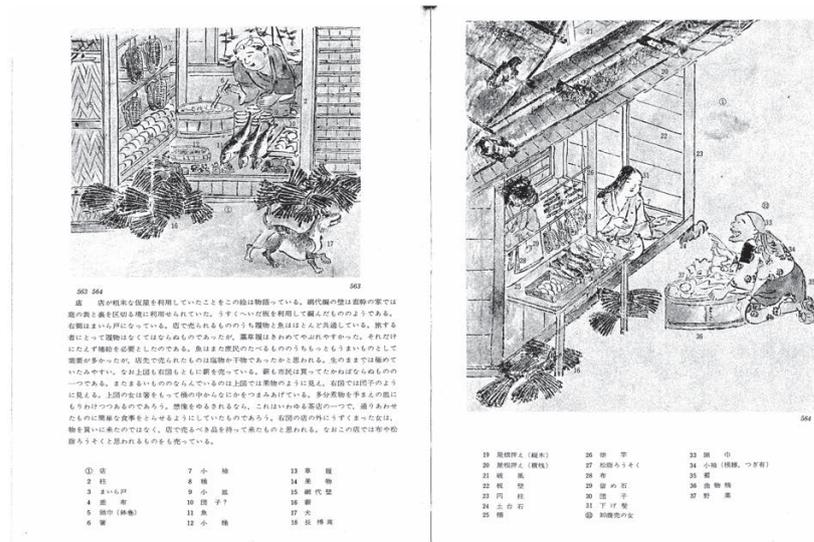
博物館の収集資料ということでは、展示に供するという目的もあるため、ビジュアル資料に目が向くのは当然のことだろう。ただ、当時、まだ画像・映像資料にさほど目が向けられていない時期にあって、既成の画像資料だけでなく、改めて当時の事物・事象を撮影して記録化を進めたことなどは、記録資料として積極的に活用する・出来るという認識が一層高まったことを示している。

また、指摘した体系的な資料収集から見えてくるのは、画像資料とその他の器物、文献資料との組み合わせによってさらに新たな発見があったり、より多くの情報抽出につながるものであり、情報量豊富な画像・映像資料の特徴を見抜き、同資料の活用の高度化がはかられたと思う。

さらに、日本実業史博物館準備室での収集資料の中には、多くの統計資料も含まれる。世の中の状況をよりわかりやすく伝えるために表・グラフ化された資料にも目を向けたのであろう。本稿で扱う資料とは異質の感があるが、数字だけの統計をわかりやすく図示するという点では、画像・映像の積極的活用に通じるのではないだろうか。

2) 『絵巻物による日本常民生活絵引』（『絵引』）に見られる画像資料認識

敬三の画像資料認識について述べる時に、取り上げなければならないことの一つに、『絵巻物による日本常民生活絵引』（『日本絵巻物全集』附録、1968年、角川書店／写真11）がある。「絵引」と



① 窓 7 小 箱 33 草 履
 2 柱 8 掃 34 菓 籠
 3 床 9 小 床 35 網 代 笠
 4 簾 簾 10 掛 子 7 16 籠
 5 障子(掛軸) 11 鳥 17 犬
 6 簾 12 小 橋 18 長 柄 杓

19 屠猪神人(屠猪) 26 御 守
 20 屠猪神人(屠猪) 27 右衛門うすく
 21 鏡 籠 28 籠
 22 鏡 籠 29 籠め石
 23 戸 紐 30 籠 物 籠
 24 土 佐 石 31 下 洋 鞆
 25 籠 32 籠
 33 籠 巾
 34 小 籠(膳籠、つま籠)
 35 籠

写真 11 『絵巻物による日本常民生活絵引』

は字引に対する敬三の造語で、絵によって引く事典といえるものである。敬三は、信貴山縁起、餓鬼草紙、絵師草紙、石山寺縁起、北野天神縁起絵巻等日本の主要な絵巻物の複製を見ている内に、描かれている主題目に沿って当時の民俗的事象が多種で相当数の量が記録されていることに偶然気づいた。

それら日本の主要な絵巻物の場面から特定の範囲を切り取り、そこに描かれた事象の中心的なものに主題を示し、描かれた民俗的事象を抽出して、それを模写し、その全体もしくは部分に番号を付し、それぞれ名称をつけて引くことが出来るようにする、読み取れる内容を解説することを考えたのである。それらを集めれば、民俗学もしくは民俗資料に時代性を与えることが可能であり、民俗資料を歴史資料に劣らぬ価値をもたせ得ると考えたのである。もちろん時代のみではなく、民俗事象の分類さらに組合せ、比較を可能とし、従来の民俗学では明らかになし得なかった領域をとりこむことが出来るようになると考えたのである。

絵巻物は、公家、僧侶、武士など当時の貴族ないし支配階級の世界を描いたものであるが、敬三は、あくまでも描かれた絵の中に庶民の姿に注目したのであった。

敬三自身が自らの構想を書いた「絵引は作れぬものか」⁽⁹⁾という文章があるので、それを引用してみよう。

「字引と稍似かよつた意味で、絵引が作れぬものかと考えたのも、もう十何年前からのことであつた。古代絵巻、例えば信貴山縁起、餓鬼草紙、絵師草紙、石山寺縁起、北野天神縁起等の複製を見て居る内に、画家が苦心して描いて居る主題目に沿つて当時の民俗的事象が極めて自然の裡に可成の量と種目を以て偶然記録されて居ることに気が付いた。柴垣や生垣の数々、屋台店の外観や内部、室内の様子、いろいろの切り様、群衆のうなじの髪の伸び様、子供の所作のいくつか、^{うずくま} 踊り方、^{はだし} 洗足と履物、貫頭衣、飼猫が異なる絵巻に二つ描かれて居るが何れも現代の犬の様に頸に紐があつてどこかに繋がれて居る様子、蒸し風呂の有様、お産の状況、捨て木(紙の貴重な時代排便後に用いるもの、今でも辺鄙な所で見かける)が京都の大路でも用いられて居る有様、足で洗濯するやり方(奥州八戸在銀の湧水泉では娘さん達が集つて足で洗濯物をふんで居る)会食時の光景又は売店には明かに茄子やかぼちゃが描れてあり魚類も多少は何だか見当のつくものもある。たすきや前かけのない時代の労働時に於ける着物の始末、破れかけた壁にはこまいが顔を出し、液体容器の各種も曲げものが多いこと、

かな以前で刀子で板を削って居る様子、頭上運搬の種々相、米俵の恰好、へつついの型、畳の始源的形態、屋根の諸形式、鋏、すき、なた、のこぎり、ちようなの様子、看病の様式、手紙とその伝達、川漁に於けるやな装置の有様等々限らない各項目が、主題目の筆とは別に眼に入つて来る。何れも画家が当時囁目した事象を率直に描いたもので、主題目よりも更に気楽に写生してある。貴重な絵画記録資料で而もそのクロノジカルな点で満点である。そこで何とか之等の資料を番号でも附して抽出して参考資料にならぬものかと、かなりの間とつおいつ考えて居たが、たしか昭和十五年頃からであつたらう、画家で且つ民俗学者である橋浦泰雄さんに交渉して、絵巻物各種を一巻一巻丹念にアチック同人で検討してはその決定に従い同君にブラックアンドホワイトで一つ一つ複写して頂くことにした。画家丈でも又民俗学者丈でも一寸都合が悪い。両方を兼ねる点で橋浦さんはうつつつけの方であつた。何回か会合して注文し、出来上るにつけて之をキャビネ判の印画紙に写し、それを土台として之に細かく番号をつけた。着物に、帯に、履物に、持ち物に、猫に、茄子に、柴垣に、舟又はその附属品にと云つた風に。各絵巻毎に主題前後の脈絡は考えず、更に一般の景色や、貴族、僧侶、上流の軍人等の文化等絵巻の主眼点を省略し美術的観点を度外視した、凡そ常民的資料と覚しきもの丈を集め、一定数毎に印刷し之に前述の通り番号を附し巻末に、近代的名称による分類によつて対象物を羅列し当該番号を示した索引をつける構想にほぼ定めた。古い時代の名称のわかるのもあるしわからぬものもある故履物の部を例にとるなら、わらじ類ぞうり類あしなか類と項を分け番号を示して置けばあしなか類はどの絵巻の何巻と何巻に出て居てその実体がすぐ見られる趣向である。

そして、此が完成すれば、古代絵巻にあらわれた履物全部を一応楽に眼を通し得るであろうし、同時にはだしの場合が非常に多いことも気がつく。又従者が伴待ちの間にひぜんをポリポリかいて居る様子や、今時の児供にはほとんど見られずお芝居の児役の仕事丈に見る小児の動作等もかなりはつきり把握できる。庶民の着物も柄合等も丹念に番号をつけたら面白そうである。

近代に入つての絵巻では、古いものが描かれてあつても、それは前代の踏襲が多いから信用出来ない故足利以前の絵巻を中心として複製を基に右様の作業を為しつつ逐次刊行して行けばその内には便利なものが出来上るであろうと考えたのである。こんな風にして北野縁起石山寺絵巻絵師草紙信貴山縁起餓鬼草紙、法然上人絵巻等いくつかずつ原稿が出来上りつつあつた。その内戦時状態が悪化し遂に之の仕事も中断して了つた。その原稿の可成の部分は防空壕に入れて却而焼いてしまうことも起つた。少し残つたのを、戦後会々アチックの出版物を購入の為にわざわざ拙宅迄来訪されたワーナー博士に見せたら大変面白がつて居られた。いつか又之の仕事再開したいと思いつつ荏苒日を送つて居る始末で自らも不甲斐なく思つて居る。併し此の仕事は民俗学の中でもマテリアルカルチュアの資料として、クロノロジーを明らかにし、文章のみでは解かりにくい面をはつきりさせる点で誰でもいいから一度は完成して置くと後から勉強する方々の助になると思う。各絵巻の原本を披見するは云わずもがな、信頼し得る複製を供覧して彼此相検討するにさえ並々ならぬ労力と時間を要する。便利な索引と云うものが出来て居る世の中に、敢て昔日の杉田玄白先生が字引を手写して苦心された様に一々絵巻物を繰りひろげて遡らないでも用を便ずる絵引があつたらと今でも思つて居る。〔昭和廿九年三月七日記〕

ここに記されているように、橋浦泰雄が登場し、具体的な方法が練られ、資料化が始まっていったのである。しかし、こうして出来あがりつつあつた原稿も戦争がはげしくなり中断を余儀なくされた。さらにかなり原稿を防空壕に入れて戦後に備えたが、結局、直撃をうけて焼失してしまったのである。

戦後、1955（昭和30）年ごろから、改めて宮本常一を中心とし、画家として奥村土牛の高弟で

ある村田泥牛が専任としてかかり、月1回の研究会において検討を重ねた。そのメンバーは、村田泥牛（模写）有賀喜左衛門、遠藤武、河岡武春、桜田勝徳、笹村草家人、宮本馨太郎、宮本常一の8名であった。敬三も熱心で、病状が悪くなってからもほとんど休むことなく熱心に出席していた。そして、『絵巻物による日本常民生活絵引』全5巻が、1965（昭和40）年1月から1968（昭和43）年1月にかけて、角川書店から刊行されたのである。

『絵引』は、諸事象・事物の相互関連、人と事物との関係が重視されており、画像の細部の把握に及んでいる。画像が内包する多くの情報を読み解くにあたっては、幅広い学問領域の成果を駆使しているが、その必要性をも示していると思われる。今日の画像資料研究の先駆的な業績としても、高い評価が与えられている。

5. 渋沢敬三における画像・映像資料の位置づけ

以上、いくつかの事例をもって、敬三の画像・映像資料について述べてきたが、ここでは、彼自身が画像・映像をどのように位置づけていたかを整理してみたい。

もともと小動物の動きおよびその生態系をしっかりと眼に焼きつけていた敬三が、その情景なりを記録する、表現する手段として図示から画像の有効性に気づいて、多用するようになり、さらに、資料性の認識を高め、使い方の高度化させていった。

敬三にとって、生活文化なりの実態を正確に伝えるために、写真・映像フィルムを用いたと思われる。ただ、そのような使い方もし続けるが、伝えるべき情報、残すべき情報を強調するための演出を被写体となる人、ものに求めたりもするようになる。絵画等においても強調して描かれた部分を敢えて活用したり、目的に応じて使用法を使い分けて考えていたと思われる。また、その制作意図の読解をしっかり認識していた。

敬三は、博物館に対して強い想いをもち続けた人であったが、蓄積された資料、調査・研究成果を広く公開出来るという観点からであろう。展示を想定してのものからかもしれないが、資料、情報を即時的・説得的という面からもより効果的に視覚でとらえられるものとしての認識が強かった。

日本実業史博物館構想で見られたように、特定の画像・映像資料だけでなく、器物資料、文書等の多様な資料との相互連関的観察、調査から情報を引き出すものと認識していたと思われる。また、それは『絵引』にも相通じるところがあり、学際的に出来る限り多くの情報をもって読み解く必要性も感じていたと思われる。そのおおもとは、画像・映像資料には、作成者の意図以外の多彩で多くの情報が内包されているとする認識があった。

最後に、『絵引』もその一種であろうが、目録、索引作成を心掛けていた敬三は、利用の側面から、データベース化して資料化をはかっていた。いわゆる今日の「情報資源化」を強く志向していたのである。

6. おわりに

スチール写真・映像フィルムは、一つの情景を切り取り、正確に映し出すという観点から記録・資料として極めて有効な素材となり得る。そして、とても文章で説明しきれない多くの情報を含むのである。

但し、資料として位置づけるためには、いつ、どこで、誰が、何を撮影したかが明確でないと資料的な価値が低いとされる。しかし、資料としての条件が整っていても、対象に手が施された虚像

の場合もある（この点に関しては、その手の施し方によって資料性を高める場合もある）。つまり、撮影者の意図を捉えつつ、利用者がいかに読解するかが重要なのである。

写された写真・映像フィルムには、撮影者の意図とは異なる多彩で、多くの情報が写り込んでいる。それらの情報も活用出来るようにするためには、多彩で多量の情報の組み合わせによる読解、学際的な分析によって、情報抽出も重要になってくるのである。

以上の事柄・特質のすべてを、時間差はあるにしても、十分に認識した上で、敬三は、画像・映像を大いに活用していたのである。但し、個々の画像・映像自体の情報が十分に集積、整理されていない点もあったことも指摘して締めくくりとする。

注

- (1) 河岡武春「敬三の人間形成——東京高師附属中学時代を中心として」（『渋沢敬三』上、1979年9月、渋沢敬三伝記編纂刊行会）を参照。
- (2) 祭魚洞生「アチック根元記（一）」（『アチックマンスリー』第1号、1935年7月、アチックミュージアム）
- (3) 筆者は、特別展図録『屋根裏のはくぶつかん—渋沢敬三と民俗学』（1988年10月、渋沢史料館）においてこの点を指摘している。
- (4) 前掲、河岡「敬三の人間形成」を参照。
- (5) 前掲、河岡「敬三の人間形成」を参照。
- (6) 河岡武春「著作解題 瞬間の累積」（『渋沢敬三』下、1981年8月、渋沢敬三伝記編纂刊行会）を参照。
- (7) 同書は、慶友社より1963年10月に刊行された。
- (8) 井上潤「渋沢敬三と日本実業史博物館構想の意義」（特別展図録『日本実業史競』、2005年10月、渋沢史料館）を参照。また、日本実業史博物館の成り立ち、および同博物館のコレクションについては、国文学研究資料館の共同研究が詳しい。
- (9) 渋沢敬三『祭魚洞襍考』（1954年9月、岡書院）。